

岩手医科大学歯学会第 89 回例会プログラム

日時：令和 2 年 11 月 28 日（土）午後 1 時より

会場：岩手医科大学歯学部 講堂（A 棟 4 階）

特別講演

1. 病理学の教え - 疾病を読み、症例に学ぶ -

The precept of pathology : Reading morphological aspect of the disease and learning through clinical cases

○入江 太朗

岩手医科大学病理学講座病態解析学分野

病理学 (Pathology) の語源はギリシャ語の病気 (パトス pathos) と学問 (ロゴス logos) の合成語であるとされている。健康なヒトの臓器や組織が、健康を損なう状態下においてどのような変化を起こすのか、それらを言語により記述し、知識として蓄積するとともに、その仕組みを明らかにすることを目指して先人達が努力を積み重ね続けてきた学問領域である。学問的な意味で病気の考え方がまとめられた病理学の黎明期とされるのはギリシャ時代に遡るが、概ね現在の形となった近代病理学が Rudolf Virchow (ルドルフ・ウィルヒョウ) により確立されたのは、19 世紀に入った 150 余年前に過ぎない。私には師と仰ぐ恩師が二人いる。一人は新潟大学歯学部口腔病理学教室の教授であった朔 敬先生と、もう一人は大宮赤十字病院病理学部長であった兼子 耕先生である。お二人は大学院時代の同門であり、共に鹿児島大学医学部第 2 病理学教室の佐藤栄一教授の弟子である (佐藤教授の師匠は「赤崎病理学」の赤崎兼義先生) が、私から 6 代遡ると Virchow に到達する。朔先生からは大学院時代に「あなた方は Virchow の 7 代目の弟子である」と言われたことがある。兼子先生は「病理学は伝統芸能である」と仰っていた。お二人とも「先人達から受け継いできた病理学」を意識され、それ故に何とか次の世代に病理学を受け継がせる

べく大変な努力をされていた。私が普段使っている病理学の知識は先人達が経験した多くの症例から得られた教訓が伝承されてきたものでもあると考えられる。

本講演では、「先人達から受け継いできた病理学」を受け継ぐことの大切さとその必要性について実症例を例にいくつか紹介すると共に、形態学的な病的変化を核酸や蛋白質の量的変化に置き換えて把握することへの道を拓くべく取り組んだレーザーマイクロダイセクション法の確立とその応用、さらに現在の取り組みについて紹介する。

2. 非侵襲的検査の画像を用いた咀嚼・嚥下機能を可視化する

Visualization of chewing and swallowing with non-invasive imaging techniques

○佐原 資謹

岩手医科大学生理学講座病態生理学分野

CT, MRI などの非侵襲的検査法は、画像診断目的で臨床で広く用いられている。本講演では口腔領域での研究例として、CT, MRI, MEG 画像データを用いた咀嚼・嚥下機能可視化の試みを紹介する。

口腔領域では、動物実験により、顎反射とその制御メカニズム、脳幹に存在するリズムジェネレータについて多くの知見が集積されており、MRI, CT などの非侵襲的手法により、大脳皮質での機能局在 (機能地図) が明らかされてきた。そこで、fMRI により得られる咀嚼・嚥下運動時の脳活動部位をそれぞれ結びつけ、機能結合ネットワークを可視化する手法により、歯のタッピング運動に際して、小脳、大脳基底核、運動野が機能的ネットワークを作り、運動の計画と遂行に関与する可能性を示した。